

阿修羅・道
元・良寛

随想集(1)

小林 道憲

阿修羅・道元・良寛——随想（1）目次

阿修羅の祈り——	1
道元の世界——	6
詩人良寛——	11

阿修羅の祈り

奈良時代、豪華絢爛たる天平文化の栄えた古都・奈良は、奈良七大寺が立ち並ぶ平城京の条坊を今も残している。その古代の東六坊大路に当たる通りの東側は急な傾斜となり、そこを登ると、七大寺の一つ興福寺の境内に入る。興福寺の堂塔は、春日の山々を背景にして、平城京から北東の方向に広がる見晴らしのよい台地に佇んでいる。法相宗大本山興福寺は、藤原氏の氏寺として奈良時代から栄えた。よく知られた興福寺の阿修羅像は、今は国宝館に展示されているが、もとは、他の八部衆や十大弟子そして本尊の釈迦如来とともに、

さいこんどう

天平六年に建立された西金堂に安置されていた。西金堂の建立を発願したのは、聖武天皇の皇后、光明皇后であった。母の橘三千代の菩提を弔うためであった。

国宝館に展示されている阿修羅像は、三面六臂（三つの顔と六本の手）の鬼神の形をした神像であるが、可憐な少年像である。胴体と腕はごく細く華奢である。上の二本の手は空間に自由に延び、中の両手は何かを抱えるようにしており、

前の手の一組は胸の前で合掌している。阿修羅像は、他の八部衆と同じく仏法の守護神でありながら、憤怒相ではなく、むしろ繊細で、内に向かった微妙な心の動きを表わしている。特に、その眉をひそめた目には憂いの影が漂い、その奥に厳しさを秘めている。その表情は、苦しみに耐えているようでもあり、何か激しい苦悩を忍んでいるようでもある。その悲しげな視線は、心の中を内省しているようでもあり、外の何かを直視しているようでもある。この少年は何を見つめているのであろうか。そして、何を憂い何を祈っているのであろうか。そこには、阿修羅が歩んできたいわば前世の悲哀が隠されているようでもある。阿修羅は、一体どんな旅をしてきたのであろうか。

阿修羅（アスラ）は、もとユーラシア大陸中央部で活動していたインド・ヨーロッパ語族のアーリア人が崇拝する太陽神、光の神であった。後、分かれてイラン高原に移動したアーリア人の古代ペルシア人は、ゾロアスター教を創造し、アスラをアフラ・マズダー（叡智の主）として、宇宙の理法の体現者にまで高めた。また、分かれてインドへ侵入してきたアーリア人も、初期ヴェーダー時代には、なお、アスラを、命を与える者、万物創造の神として、この神に最高神的地位を与えていた。

ヒンドゥー教の叙事詩『マハーバーラタ』に出てくる乳海攪拌神話でも、アスラはなおその地位を保っている。同じ天空神であったインドラをはじめとするデーヴァ族は、アスラをはじめとするアスラ族と協力し、巨大な山に大蛇を絡ませ綱引きし、原始の海を掻き混ぜたところ、大海は乳海になり、そこから女神・白馬・宝珠などが現われ、最後に不死の靈薬アムリタ（甘露）が出現したという。ここでも、アスラは、生命の永遠を約束する創造神になっている。

ところが、インド神話では、アスラは、時代が降るにした

がって、悪神へと没落していく。天界に住む神々の王、インドラが強調されるのに応じて、それと対照的に、アスラが悪神にされていったのである。かくて、アスラは、インドラとの絶えることのない戦いを繰り広げる猛々しく恐ろしい軍

神として描かれるに至った。仏典でも、阿修羅は、須弥山しよきせんの北にある大海底に住み、天上の神・帝釈天（インドラ）と凄まじい戦いを繰り広げる悪神として扱われている。非天の地位に落とされたのである。しかも、阿修羅は常に敗北する。さらに、インド神話でも、仏典でも、阿修羅は、日食や月食を引き起こす力をもつ鬼神ともされている。興福寺の阿修羅像の天上に揚げた左右の第二手は半円形の太陽と月を持ち上げていたであろうと考えられ、左右第三手は弓矢を持っていたであろうと考えられているのは、このインド神話や仏典に基づいている。

この阿修羅の永遠の戦いには、もとは善なる創造神であったのに何ゆえに悪神に貶められたのかという憤りもあったに違いない。阿修羅は、そのような終わることのない苦痛の中で、戦うことの苦しみを永遠に背負っているのである。仏教で、妄執によって苦しむ闘争の世界を〈修羅道〉と言い、六道の一つに数えられているのは、この神の苦悩の旅を反映している。人は、前世の業によって、地獄、畜生、餓鬼、阿修羅、人間、天と、六道を輪廻していかねばならないという。怒りや戦いの止むことのない状況を〈修羅場〉と言っているのもこのことによる。

しかし、また、仏教では、阿修羅は八部衆の一人として仏に帰依し、仏法を護持する守護神ともなる。現に、『金光明最勝王経』の「夢見金鼓懺悔品」でも、婆羅門こんくの打つ金鼓の音に十大弟子も八部衆も耳を澄まし、釈迦如来に帰依する様

子が描かれている。阿修羅もその一人であった。『金光明最勝王經』では、過去に罪を犯した者は、その業障により六道など救いのない悲惨な世界に落ちるが、懺悔によってこの悪業や煩惱を消滅させ、心を浄化すれば必ず救済はあると説かれている。興福寺の西金堂に安置されていた十大弟子や八部衆の群像は、この『金光明最勝王經』の説く懺悔の修法を行

ほうえ

なっている法会の瞬間を、いわばジオラマにしたものといわれる。阿修羅像の眉間から発せられる厳粛な表情も、おそらく、金鼓の響きに聞き入り懺悔し心を浄化させようとしている少年の心の動きを表わしたものであろう。

しかし、懺悔は、単に罪を悔い改めて救われきってしまうことではなく、むしろ、自らの中の罪悪をじっと見つめること、そしてその負荷に耐えることではないか。人間は煩惱に迷い、生死に迷う存在である。人生の現実には、苦や悪、罪に満ちている。人間は、貪欲、瞋恚、愚痴、あらゆる無明から逃れられない。生きるということは煩惱とともに生きるということである。憂いを含んだ阿修羅の眼差しは、この自己の内の、そして外の、どうすることもできない罪悪を凝視している眼差しではないか。内面の罪を見ることは外面の罪を見ることであり、外面の罪を見ることは内面の罪を見ることである。阿修羅の深く貫き通すような眼差しのなかでは、この二つの厳しい視線が照射しあっている。

仏は一切衆生を救うというが、衆生は現に苦しんでいる。現実には、救い難く醜いものである。阿修羅の視線には、仏果によって救われることへの歓喜よりも、むしろ、救い難い人間の罪への悲傷の感情が表われている。確かに、阿修羅は、自分の心の中と外の罪業を見つめ、今、仏の救いの中に帰依しようとしているのだが、そこには救われきってしまうことへのためらいさえ感じられる。それほど、この神は、人間の

奥深くにある苦悩、悲哀、この世の罪を深く見つめているのである。

阿修羅は、善と悪、煩悩と救い、悟りと迷いの狭間に立つ神なのである。煩悩生死の足下に仏の救いや悟りはあるが、逆にまた、仏の救いや悟りの足下に煩悩生死の世界はある。阿修羅は、真理と非真理の境界に立って、非真理の重荷を背負うと同時に真理の重荷をも背負っている。そこに、この神の二重性がある。

争いが絶えない世の衆生の苦しみを一身に背負い、その苦しみを直視しつつ救いを求める。その苦悩と救済の狭間にこそ、祈りはある。胸の前でグッと肘を張って手を合わせている阿修羅の合掌の姿は、煩悩と救いの間に立った祈りの形である。人間の罪悪を厳しく見つめながら、その苦痛に耐え、しかも救いを求める形を表現するには、純粹多感で、それゆえに世の矛盾を知り出した美しい少年の祈りの姿でしか象徴することができなかつたのであろう。

阿修羅は、長大な時間と空間を生きてきた。善神から悪神へ、悪神から善神へ、善神ともなり悪神ともなった阿修羅の長い遍歴には、善悪の渦巻く人間世界の歴史が重ね合わせられている。その栄光と挫折、闘争と敗北、激しい怒りに焼き尽くされてしまいそうな修羅道を潜り抜けて、その果てに辿り着いた阿修羅の祈りの姿は、われわれに何か深いものを語りかけている。

あおによしと称えられた奈良、そのきらびやかな仏教文化の栄えた天平時代も、決して安泰な時代ではなかつた。天平時代そのものが、長屋王の変という異変から始まっている。皇親勢力の巨頭として藤原氏を圧倒していた長屋王が、藤原氏出身の光明子の立后を目指す藤原四兄弟の陰謀によって、自害に追い込まれた事件である。無実の罪であった。ところが、その光明皇后を後ろ盾に政権を奪還した藤原四兄弟も、

まもなく、天然痘の流行によって相次いで死去してしまう。弱体化した藤原氏に代わって政権を握った橘諸兄は、政権を奪い返そうとした藤原広嗣の乱を鎮圧しはしたが、藤原氏の政権奪還の企ては続く。藤原仲麻呂が、光明皇后の権威を背景に政権と軍権の両方を掌握し、橘諸兄を失脚させるに至ったのである。その藤原仲麻呂も、橘諸兄の子・奈良麻呂のクーデター事件を鎮圧したものの、光明皇太后の崩御以後は急速に権力を失い失脚、自ら乱を起こしたが討たれて滅亡する。さらに、権力闘争に明け暮れる中央政界とは裏腹に、世の中は、租税や労役の負担に耐えられなくなった人民の逃亡や浮浪が相次ぎ、疫病の流行や飢饉や天災の頻発などで疲弊した。天平時代とは、そのような時代だったのである。

煩悩と救いの狭間を凝視している孤独な阿修羅像の視線は、このような闘争と悲惨な事件の渦巻く修羅場をじっと見つめてきたのである。

興福寺も、平氏の焼き討ちに遭うなど、何度も火災に遭ったため、阿修羅像の安置されていた西金堂は、今は基壇のみが残っているだけである。跡地の北東の一隅には、夏ともなると、炎天下、百日紅の花が咲き続けている。

道元の世界

春は花に宿る

越前吉田郡永平寺町吉峰よしみねに、曹洞宗の禅寺、吉峰寺きつぼうじがある。日本曹洞宗開山、道元が永平寺に移るまで修行し、弟子の指

導に努めたところである。典座（台所係）として道元に仕えた徹通義介が、水を汲んだり食糧を運んだりしたといわれる険しい山道を登りきると、聳え立つ老杉の巨木を縫ってひっそりと佇む吉峰寺の法堂が現われる。あたりは厳かな空気が漂っている。

鎌倉時代の寛元元年七月、宇治の興聖寺を弟子に任せ、越前へ移った道元は、まず、庇護者、波多野義重の領地、志比の荘にあった古寺、吉峰寺に落ち着く。時に、道元、四十四歳のことであった。道元についてきた弟子は、わずか十数名だっただろうと言われる。「都の喧騒を離れ、深山幽谷でひたすら修行せよ」という大宋国の先師・天童如浄の教えに従い、正しい仏法を実践するための入山であった。道元は、この吸い込まれるような静けさに満ちた吉峰寺でただひたすら座禅に打ち込み、弟子を育てるとともに、新しい本格的な道場（後の永平寺）の建立に手を尽くしていた。

この約一年間滞在した吉峰寺での修行生活は充実したものであった。この間、道元は、『正法眼蔵』九十五巻中の約三分の一を撰述している。とはいえ、越前の地は雪も深く、寒さも厳しく、修行生活は予想以上に厳しいものであった。実際、その年、旧暦十一月六日（今の十二月下旬）大雪が降った。

『正法眼蔵』（梅華）は、この時書かれ、衆に示されたものである。ここでは、まず、先師如浄の天童山景德寺での垂示

を取りあげ、それを、心を込めて解説している。

老いた梅の木がたちまち花を開く時、それは、花開いて世界が起こるということである。花開いて世界が起こる時節は、とりもなおさず春の到来である。春が到来して花が開くのではなく、花が開いて春が到来する。梅は早春を開く。雪の中

に咲く梅の花こそ、仏の眼である。梅の花の開く時、諸仏は出現する。雪の中に一枝の梅華が香る時、そのとき大地が生じ、世界が起きる。一花が万花を開き、春は梅花に宿る。梅の花の中に百億の国土があり、その国土に開いた花が、すべてこの梅の花の徳分を分かち。

ということが、だいたい『正法眼蔵』(梅華)で語られていることである。無数の花が一輪の花から生まれてくるように、花が開いて春が来る。むしろ、花の中に春が咲く。春は花に宿り、人、春に会う。春、ものみな新しくなるように、一輪の梅花という小宇宙の中に、大宇宙は開かれてくるというのが、道元の言うところである。

しかも、雪の中に一心に咲く梅の花のように、一僧がひたすら座禅している姿、それがそのまま悟りの姿であるというのが、道元の語り尽くしてきたことであった。だから、悟りの世界を別のところに求めてはならない。悟りを得るために修行するのではなく、修行することがすでに悟りの中にある。

修行と悟りは一つである。坐っている姿がすでに悟りの世界の中にあるというのが、道元の語ってやまなかったことであった。目前に働き出ているものは、すべて深い仏の命の働きであり、われわれの一挙手一投足こそ、宇宙の命の表現なのである。

『正法眼蔵』(梅華)の巻の奥書には、「この時、日本国は、

仁治四年十一月六日、越州吉嶺寺に在り。深雪三尺、大地漫々たり」とある。この大地を覆う真っ白な雪原も、道元にとっては、悟りの世界そのものだったのであろう。仁治四年は、実際には改元されていたから寛元元年のことである。事実、より古い写本では寛元元年とあるから、道元も、おそらくそのように記していたのであろう。

自然を経となす

道元は、その後、寛元二年、吉峰の近くの大仏寺山麓の深山幽谷の地に、出家参禅の根本道場として大仏寺を建立し、のちこれを永平寺と改称した。日本曹洞宗大本山永平寺である。以来、今日に至るまで、道元が宋から伝えた曹洞禅は絶えることなく守り伝えられている。

しひ

越前国志比の荘に、大宋国の天童山・景德寺に模して開かれたこの道場は、今もなお数百人にのぼる役寮や雲水が座禅に明け暮れる霊域である。樹齢七百年にも及ぶ杉の老木に囲まれた参道を通り抜けると、山門に至る。この山門から山のほうを眺めると、七十余りの諸堂が林立するこの寺は、山の斜面に建てられていることがわかる。だから、各伽藍は、かなりの勾配をもった階段で結ばれ、そこをよく若い雲水たちが休む間もなく掃除している姿に出会う。これもまた修行である。

特に冬は、禅の道場としての永平寺を引き立たせる。山門から眺めた冬景色も、凜として壮大である。夜ともなれば、積雪の上に雲間からのぞく月光が反射して、雪明りの中に、五代杉の陰をくっきりと映し出す。そして、雪の中に埋まった僧堂の中には、一心に座禅に勤しむ雲水の姿が見える。す

べてが静寂である。ただ、音を立てて流れていく永平寺川の溪流だけが、唯一、この静寂を破る。雪、月、杉、水、山門、僧堂、みな、ここでは、すでに悟りの世界の中にあるようである。

道元は、『正法眼蔵』(山水経)^{しょうぼうげんぞう}のなかで、いまここにある山水は、昔から伝えられている仏法の現われだと言っている。一滴の水の中にも無限に広い仏国土があり、一滴の草の露にも月は映り、一塵の中にも全世界は宿っている。雲の中にも、風の中にも世界があり、火の中にも、地の中にも世界がある。一茎の草の中にも、一振りの杖の中にも世界がある、そして、世界のあるところには、必ず悟りの世界があると、道元は言う。

しかも、世界は、そこに住むものの種類によって様々に映っている。人間が水と見ているものでも、龍魚は宮殿と見、楼台と見、流れ行くものとは見ない。鬼は、水を、猛火とな

し、血膿^{ようらく}と見る。水を瓔珞と見るものもあり、妙なる花と見るものもある。仏法を学ぶ者は、水を考えるにも、人間の立場に固執してはならない。山水を見るのに、人間の見方にだけとどまることなく、廣大無辺の立場に立たねばならないと、道元は言う。

『正法眼蔵』(山水経)で語られていることは、山川草木が、そのままの姿で法を説いている経だということである。山河大地、日月星辰、草木虫魚、みな、仏法を説く経巻である。松を吹く風の音も、溪谷を流れる水の音も、みな諸仏の説法である。山水をお経として学ばねばならないというのである。

道元が『正法眼蔵』で繰り返し語ろうとしていたことは、一点の中に全世界が包摂されるという大乘仏教の世界観で

あった。この世界のどんなにささやかなものの中にも全世界が宿っている、そして、ここでは、万物が互いに映し合い、つながり、連関している、そういう悟りの世界を描こうとしていたのである。

わたしたちは、昔から、野に咲く小さな花にも大自然の大きな命を直感してきた。春、花が咲き、夏、不如帰が啼き、秋、木の葉が散り、冬、雪が積もる。この大自然の営みすべてが仏法の現われであるというのが、道元の語ってきたことなのである。

山も川も大地も、自然はみな仏性ぶつしょうの現われであり、仏性の海に建立されたきらびやかな館である。山が山であり、川が川であり、大地が大地であるのは、仏性が仏性として働き出ていることである。山や川を見ることは、そのまま仏性を見ることであり、そのなかで、人もまた自らの仏性に目覚める。

この道元の考えは、生きとし生けるものにはみな仏性が宿っているという大乘仏教の伝統的考えを引き継ぐものであった。しかも、この伝統的考えは、その後の室町時代に花開いた茶道や華道、江戸時代の俳諧にまで、延々と引き継がれてきたものであった。それは、自然のあらゆるものに生命力を認める日本人の自然観に源泉をもっているのであろう。

詩人良寛

生涯ものう懶立身 生涯 身を立つるに懶く

騰騰任天真 とうとう まか 騰騰として 天真に任す

囊中三升米 のうちゅう 囊中 三升の米

炉辺一束薪 炉辺 一束の薪
誰問迷悟跡 誰か問わん 迷悟の跡
何知名利塵 何ぞ知らん 名利の塵

夜雨草庵裡 うち 夜雨 草庵の裡

雙脚等間伸 そうさやく とうかん 雙脚 等間に伸ばす

これは、よく知られた良寛の漢詩である。おそらく、良寛が越後国上山の五合庵に住していたころの作であろう。この詩を読むかぎり、そこには、何の計らいもなく自然の流れに任せ、無心に自足している良寛像が思い浮かぶ。迷いだの悟りだのと問うこともなく、世間の名利も求めることもなく、ただ奥深い草庵の内で夜の雨の音を聴きながら足を伸ばして休んでいる良寛の静かな境涯が思い出される。騰騰任運の境涯である。しかし、この詩の冒頭で「身を立てるのに懶かった生涯であった」と来し方を回想してもいるように、そこには、この沙門でもなく俗人でもなかった僧のどこか翳りのある人生が暗示されている。

良寛は、江戸宝暦年間、越後出雲崎の大庄屋の家に生まれ、十一歳の時大森子陽の塾に入門して儒学を学び、十六歳から名主見習い役を務めた。一説によれば、父（以南）は、本当の父ではなかったのではないかとも言われる。しかも、安永年間に入ると、時代の変化とともに家運は傾き、刺々しい争

いごとが続いた。魯直頑愚で世才などもちあわせていなかった少年は、是非善悪の対立の世を煩わしく思ったに違いない。そして、この醜い紛糾に耐えられなくなった少年は、弟に家督を譲る書置きをして家出、寺に逃げ込んだ。父を捨てて出奔したのである。そして、二十二歳の時、その地を訪れた國仙和尚に随行して、備中玉島の曹洞宗圓通寺に行き、そこで十余年辛苦修行した。

その修行のありさまは、師家の室に入っただけの間答にも誰にも遅れをとらず、朝の参禅もいつも率先してやったというから、真剣なものだったのであろう。しかし、まわりには、大衆に説法するためのみの仏法があり、口だけ達者で内実のない僧の群があった。経を説く僧も、確かに立て板に水のように雄弁ではあるが、本来のことに関しては一つも間に合うものはなかった。それでいて、彼らは、自ら有識者と自認して憚らなかったのである。圓通寺で良寛が見たものは、俗世と同じ立身のみを求める僧侶たちばかりであった。良寛は、圓通寺にあっても、なお我が道の孤なることを悟らざるをえなかったのである。門前の町の人とも、誰一人顔見知りがないほどだったという。さらに、良寛自身、國仙和尚による道元の『正法眼蔵』の提唱を聴くに及び、独り力を用いることの空しさを悟るに至った。圓通寺で一心に修行しはしたが、「虎を描いて猫も成らず」と言っているように、良寛は、ついに寺僧として成功することはなかったのである。

かくて、圓通寺での修行の空しさを悟った良寛は、師の許を辞して翻身、全国行脚に出立した。その五年に及ぶ行脚の旅の足跡は定かではないが、しかし、ここでも、失望を招くものであったようである。良寛は、仏法を広めることを期して、古老の門を叩いて問法もしたが、もはや祖師・道元の仏法を正しく伝えうるほどの者はどこにもいなかった。事実、その当時の曹洞宗の宗門をはじめ仏教界も沈滞していたよ

うで、それを、行脚していくうちに目の当たりにして、本来もっていた衝天の志気も失われていった。

「唱導詞」という長詩の中では、次のように言われている。これは、当時の曹洞宗の衰微と退廃を慨嘆した激情の詩である。

縑素^{しそ}年年薄 縑素 年年薄く
朝野^{あさの}歳歳衰 朝野 歳歳衰う
人心^{にんしん}時時危 人心 時時危く
祖道^{そだう}日日微 祖道 日日微なり
.....
巴歌^{はか}日盈岐 巴歌 日に岐に盈つ
吁嗟^{あゝ}余小子^わ 吁嗟 余れ小子
遭遇^{そうご}於此時 此の時に 遭遇す
大厦^{たいか}将崩倒^{まさ} 大厦の将に崩倒せんとするや
匪一木^{あら}所支 一木の支うる所に匪ず
.....

良寛にとっては、当時の僧侶も俗人も、上も下も年ごとに軽薄化し、人の心は荒み、祖師の遺法は廃れてしまったと受け取られたのである。大きな家が崩れ落ちようとするとき、どうして一本の木で支えることができようか。俗っぽい歌ばかりが日に日に溢れている時代、無力な修行僧一人が正法を

説いて宗門の弊害に挑んだとしても、もはやどうにもならなかったであろう。

良寛が出家の世界で見たものは、あまりにも世俗的な僧侶らの墮落であった。修行に努めず道心なき僧たち、師家の語り口を真似てそれに追従し出世を目指す僧たち、昼夜大声を出して説教しながら、本心はただ口腹のために一生俗事に心を費やしている僧たち、悟りもしていないのに如何にも悟った

風をならし俗人たがらを誑かす僧たち。このような末世の風潮が純朴さを払いのけてしまった状況の中で、良寛は何もすることができず、自己の立ち位置を見出せなかったのであろう。

ある詩の中では、「已やんぬるかな、復また何をか陳のべん」とさえ言っているが、そこには、殺伐とした精神的情景の中で呆然と立ち尽くす一修行僧がいた。良寛がその後何度も詩の中で述懐しているように、ここには、当時の宗教界の風潮に対する憤りいかと哀しみ、そして孤独が秘められている。

世は世俗化の時代であった。泰平に甘えて人心は弛み、人を騙して自慢するペテン師はびこが蔓延り、世情は駆けるような勢いで軽薄へと流れた。文化文政の時代である。確かに、そのころ、江戸では、狂歌や狂詩、戯作や戯文、浮世草子や洒落本はやが流行り、学者や詩人は言葉の吟味だけに励み、つまらぬ

言句もてあそを弄び、絶えず新奇な知見を追いかけていた。良寛の詩には、世相の頹落に対する悲嘆が散りばめられており、しかも、そう言わねばならなかった苦渋の気分が漂っている。その時代に対する鋭い批判を読むと、良寛は、歴史的現実

超然としていた人ではなかったことが分かる。

良寛がすべてを捨てて故郷越後に帰り、国上山の五合庵に籠ったのは、このような退廃した状況にあつて、もはや正道を広めることも不可能と悟ったことによるであろう。もとより、良寛には、俗化した宗門を立て直し、そこで身を立てるほどの能力も才覚もなかった。詩の中では、「歳月が私の味方になってくれなかった」と言っているが、そこには、良寛自身の挫折と諦めがあつた。逆に言えば、良寛の安心立命は、人心の教化に当たるといふ宗教家としての道を断念し、そこから脱落し、限りない寂寥の中に住まうことによつてのみ得られたのだとも言える。出雲崎の生家を出奔してから二十余年のことである。以来、良寛は、人に向かって法を説くことはなかった。宗教家になるには、あまりにも詩人でありすぎたのである。

蕭条三間屋 しょうじょう 蕭条たり さんげん 三間の屋 おく
終日無人観 終日人の観る無し
独坐間窓下 独り間窓の下に坐し
唯聞落葉頻 しき 唯だ落葉の頻りなるを聞く

寒炉深撥炭 寒炉 深く炭を撥く か
孤燈復不明 孤燈 復た明るからず き
寂寞過半夜 寂寞として半夜を過すに
透壁遠溪声 壁を透して溪声遠し

これらも、五合庵に住していたころの作であろう。秋、誰

も訪れることのないものさびしい小さな庵で、独り坐っていると、落ち葉の降りしきる音が聴こえてくる。また、冬、ぼつりと燈った灯の下眠れずに夜半を過ごしていると、遠くの谷川の音が聴こえてくる。深山に独り在る者のみに聴こえてくる自然の音が、これらの詩ではかえって辺りの静寂さを引き立てている。良寛の詩は、どれも透明な寂しさに包まれ、沈痛なほどの深い愁いに満ち、果てしない孤独感を感じさせる寂寞とした心境を伝えている。

もともと、多感繊細な感性の持ち主であった良寛は、長い修行過程で、すでに是非善悪の看破に飽き、到るところ意に叶わず、為すところなく故郷に帰ってくるしかなかった。その無力感や憂愁の感情とひとつになった自然の響きを、この詩僧は伝えている。転変する世の中を繋ぎ渡る舟のように生きていく人生は一場の夢のようであるが、良寛は、それを、人里離れた侘び住まいの中でじっと見ていたのである。大自然の流転に任せた騰騰任運の生き方の背後には、そのような悲しいばかりの孤愁の情があったのである。

良寛が住した五合庵は、大正時代に再建したものが今も国上山中腹にあり、鬱蒼とした木立の中でひっそりとした佇まいを見せている。新緑のころは不如帰が啼きしきり、秋は紅葉が降りしきるが、真冬ともなると豪雪に埋まり、溪谷の音も途絶えるという。